

絵の手紙

ちひろ

今朝届いた手紙。控えめなパステルグリーンの小さめの縦長の封筒。中に入っていたのは、四つ折りの白い一枚の紙。広げてみると、懐かしい風景が描かれていた。

どこの景色だろう？ 青い空、遠くにいくつかの山並み、手前に青草が茂っている。草の茂みの中に淡い桃色の小さな花びらが見える。絵の他に文字はない。私は、紙を裏返してみたが、真っ白なままである。顔を近づけると、微かに甘い香りがする。桃？ びわかな？

封筒の表には、私の名前が行儀よく書かれている。差出人の名はない。私は、四つ折りの白い紙に描かれた風景を見てひとり微笑んだ。そして部屋の机の前の壁に画鋲で貼りつけた。しばらくここで向き合うでしょう。実は、このような封書を受け取るのは、これで3回目である。初めて差出人の名がない封筒が届いたのは、三か月前の休日。その封筒にも、私の名前だけが書かれていた。その時は、疑問が渦巻き、時を忘れて推理に没頭した。差出人の名がないだけではなく、私の住所が書かれていなかったのである。では、なぜ郵便受けに届けられたのか？ 差出人が持参したのだろうか。わざわざ、こんなミスティアスなことをする人間が私の身近にいるのだろうか？ 思いを巡らせてはみたが何も思い当たらなかった。その封筒に入っていたのは鉛筆で描かれたスケッチ画であった。りんごのみかん、トマトがコロンと台の上に鎮座している。少し不器用な雰囲気があり、私はくすくすとひとり笑いした。その日は一日中、食事の時も買い物に出かけた時も、手紙のことが頭から離れなかった。夜になり、その絵を眺めているとスケッチの影の部分の暗い闇がだんだん大きくなり、私は吸い込まれていった。

陽の光が部屋の中に入り込み目が覚めた。朝が来ていた。ああ、いろいろ考えているうちに寝てしまったのだ。昨夜の疑問の渦を縮小し、私は平日の仕事に戻っていった。

二回目の手紙も、やはり休日の朝届いた。その日は、平日よりも早く目覚めた。何気なく勝手口から庭に出て、玄関先までぐるりと回り、ポストを覗き込んだ時、手紙を見つけた。その封筒は、私の名前だけが行儀よく書かれていて差出人の名がなかった。私は、その封筒を手に取り、再び疑問の渦に飲み込まれた。また、かすかに恐怖も感じた。淡いサーモンピンクの封筒に入っていたのは、やはり行儀よく折り目をつけた四つ折りの白い紙。広げてみると、麦わら帽子をかぶった後姿の子が、たんぽぽ畑に立っていた。風に揺れるワンピース姿。陽を浴びるたんぽぽの黄色が薫るような感覚に陥った。差出人は誰だろう？

なぜ手紙を、いや、絵を送ってくるのだろうか。これは、私宛の手紙なのだろうか？ 散々
思いを巡らせても、私の思いに当たるものは何も浮かんで来なかった。

そして、今日、三通目の手紙が届いたのである。「二度あることは三度ある」「三度目の
正直」と言う諺が脳裏に浮かんだ。三度目ともなれば、妙に経験値は上がり、謎の解明で
もしてみようかと心に余裕が出てきた。

一通目の絵は、果物、いわゆる静物画であった。二通目は、たんぼぼと少女の人物画。
三通目は、山緑の風景画である。受け取りはいずれも、私の休日、しかも早朝である。私
は、記憶をたどり始めた。例の封筒を見つけた時の情景に、人物や動物はいなかったか？
天候はどうだったかな？ 私はご飯を食べる前だったか後だったか？ 手紙が届いた日の
前後に仕事や家庭の事で変化はあったか？

そうだ、その休日の前夜は残業で、帰宅時間は日付を越えていた。帰宅後、吸い込まれ
るように眠りについた。心身共に疲れ切った時、私は夢も思い出せない程、深い眠りに落
ちる。今朝も、その深い眠りから目覚めて平和な気分だった。

『お姉ちゃんつてば、私の話聞いているの？』不意に妹の声がした。慌てて振り返り
りを見渡すと、ベランダのカーテン越しに私を覗んでいる妹の顔が見えた。『ごめん、ご
めん。で、何の話だった？ 聞いているよ』と言いながら、妹が背を向けると同時に私は
ゴロンと横になって、ベランダの方に顔を向けて目を閉じた。妹の声ははっきり聞こえた。
明るいう調子で、時折笑っている。学校での出来事、友達と遊んだ話など他愛のないおしゃ
べりはクラシック音楽のように延々と悠々と続いた。

再び目覚めると陽は高く、時計は正午を指していた。休日は寝て過ごすことが多い。特
に朝早く起きた日は再びうたた寝ができる。至福の時だ。平日の仕事で、昼食後に居眠り
をすることがあるが、その時の罪悪感は何とも情けない。休日の居眠りは罪悪感にも邪魔
されない。それでも調子に乗って寝てばかりいると、腰や背中痛みで、急に病に罹った
ような錯覚に陥り心細くなる。そして、人間は寝る時間と起きて動く時間のバランスが大
切だということを思い知らされるのである。休日明けの出勤、その時の憂鬱は休日の過ご
し方を思い起こさせ、時には言い訳をする自分が迫ってくるようだ。憂鬱が迫ってきたら
休めばいいんだと最近はあるようになった。物心ついた頃から学校や社会という集団生
活の中で学んだ知識、喜びや辛さが年を重ねるごとに浮き彫りになり、自己分析で対処方
法が身に着くのかも知れない。最も、独りよがりの対処方法では他人との関係性において
はあまり意味がないものになる。

さて、絵の手紙の話に戻ろう。

私は机の前に立ち、壁に画鋲で貼りつけた三枚の絵をあらためて眺めてみた。おやつ？
少し前かがみで絵を覗き込む。なんと、一枚目の絵がセピア色に変化しているではない

いメロディーが流れて来た。瞼に滲み入るような、心が揺れるような控えめな音色。絵を見ていたはずの私はいつの間にか深い眠りについたようだ。遠くで聞こえていた母の声だ。だんだんはつきりしてきた。その先には父の笑顔も浮かぶ。『久しぶりにみんなで家族会議をしようか』なんて、父親らしい語り口だ。

それからほどなく、三枚の絵は、木の葉のように薄い線になって風に誘われて行ってしまった。

♪からだじゅう身体中がふわふわ、髪の毛はサラサラ

♪てのひら掌のえんぴつ、ことりと落ちた。

ことばに飲み込まれたわたし♪

朝、目が覚めた。今日も一日がはじまる。

差出人の名のない手紙は、今も私のところに時々届く。そして、机の前の壁に画鋏で貼りつけるのだけれど、いつも三枚のままである。私が絵をゆっくり眺めるといつの間にかセピア色になり、木の葉の糸になって風に誘われて消えてしまう。それもいいかなと思えるようになった。窓を開けて、ありがとってつぶやくと母の声が遠くに聞こえるから。

私に届く絵の手紙の話を、あなたに語る日は時々やって来る。だから、このまま歩き続けてみよう。ふわりとした風とハミングが、私の歩みを支えてくれるようで、ね。